



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	'*Did Frank probably beat all his opponents?' の構造 : 発話における話者の心的態度の一貫性について (6)
Author(s)	葛西, 清蔵
Citation	北海道大學文學部紀要, 36(2), 1-49
Issue Date	1988-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33522
Type	departmental bulletin paper
File Information	36(2)_PL1-49.pdf



‘*Did Frank probably beat all his opponents?’ の 構 造

——発話における話者の心的態度の一貫性について——

(6)

葛 西 清 蔵

0. 言語表現には話者の気持のもち方がぬき出しがたく言い表わされている。その気持のもち方は心的態度といってよく、あるいは話者の立場を表わすという点では、Fowler¹⁾のように視点といってもよい。もし言語表現を客観化された部分と客観化されない話者の主観的な部分から成るとし、前者を命題(内容), dictum, 後者を心的態度の表現, つまり法表現 modus という伝統的なよび名でよぶとすれば、話者の気持のもち方, 視点は明白に後者, 法表現に属するものである。

葛西(1987)では話者の心的態度がどのような表わされ方をするか, 考える場合を, どのような方法でどの場所に表わされるかをみた。そこでは従来, 命題にかかる蓋然性を表わす副詞がとりわけ心的態度を表わす法副詞としてあつかわれることが多いがそれは話者の心的態度の表現のごく一部にすぎないことを特につよく指摘した。

葛西(1981), (1984), (1985), (1986)では発話において話者の心的態度は基本的に一貫していなくてはならないことを指摘し, 多くの統語上の制約もこの点から説明可能であることをのべた。会話が効果的に行われるためには守るべきいくつかの原則が考えられるが, 筆者の主張は, 相手との会話での原則以前に話者自体が一人の発話者であることを保障するものである。これが破られると発話者としてその資格を失うことになりかねない。心的態度の一貫性のなさは話者が精神的に分裂²⁾した状態をつくり, 発話そのものが成立しないことになるのでこれはむしろ当然の帰結である。

基本的に話者の心的態度は一貫していなければいけないが、葛西 (1986), (1987) では「文」をこえたレベルでは心的態度に「ゆれ」がおこる場合がありうることを指摘した。まず (1986) では、文の長い連続の中では時制が統一されず変化することがあるが、これは話者の気持のもち方の変化の現れであることがあることを、また (1987) では、中右はモダリティ (法表現) であるかどうかの峻別には付加疑問をつかうが、その場合問題にされているのは蓋然性の法副詞の中でも蓋然性の高いもののみであり、あまり明確でなかったり、態度にゆれがある場合が考慮されていないふしがあることを指摘した。

本稿はこの二点の検討をさらに進めようとするものである。すなわち 1. では、いわゆる付加疑問は基本的には一つの心的態度を表わした文に対して、さらにもう一つの態度を表明する別の文が接続詞なしに並置されたものであり、いわゆる重文の一種である終止文と考えてよく、これは口語に典型的に見られる性質のものであること、そこには線条的なものとしての時間の流れとそれにとまなう話者の気持のゆれ、動揺があらわされうることを見る。2. ではとかく問題の多い *Sir Gawain and the Green Knight* の時制のかわり方を検討し、そこに使われる現在時制はもはやいわゆる「歴史的現在」ではあつかいきれないもので、その変り方は話者の認識の仕方、視点の変り方とかかわっており、これが物語の展開と密接に関係していることをみる。3. は結びである。

1.0 中右 (1979) は、1 b. について後半部は否定を含む付加疑問で、

1. a. John is tall, isn't he.
- b. DEC_{Mod} + [John is tall]_{Prop} + [isn't he]_{Mod}

これは「通例下降音調のもとに、付加疑問法、つまり、話し手が聞き手に自ら想定するところについて念を押すという態度を実現している」とすることができる」とのべている。しかし「上昇調をとれば、その機能は純正な Yes-no 疑問文のように、聞き手の情報を求めていることになる。つまり話者は命題内容の真偽を不明としたうえでその真偽をたずねている」(1980) のでつぎのような例を上昇調でよめば非文になるとする。

2. a. *Frank probably beat all his opponents, didn’t he?
 b. *Max certainly has finished eating dinner, hasn’t he?
 c. *Charley evidently discovered a flaw in my argument, didn’t he? —Jackendoff, 中右

上昇調の付加疑問では、一つの命題内容に対してなんらかのコミットをし、その蓋然性をのべていながら、同時にその真偽を問うており、「二つのモダリティが矛盾する」から非文になるとする。

これを表面的に見るかぎり筆者の主張とかわるものではない。しかしここには注意しなくてはいけない点がある。その一、下降調の場合は問題ないとして（中右の説明文に「通例下降調」とあることに注意しよう。Jackendoff は ‘...best with the falling intonation...’²³⁾ という言い方をしている）上昇調の付加疑問も確実に一つの法表現を含んでおり同時に、前半部も又確実に（明示的にであろうがなかろうが）一つの法表現を含んでいる。1. b ではそれが DEC_{Mod} として示されている。これは後半部の「疑問法」と対立して「モダリティが矛盾」するので非文になる筈だが、現実には非文とならない。その二、2. a, b, c の各文で使用されている副詞はいずれも命題内容に対する蓋然性の高い法副詞であることである。したがってこれらの文が非文であるのは3の文が非文であることと平行するものであって、4. a, b にもあてはまるほど一般的なものではない。4 では蓋然性をあらわす法副詞があり、一方では情報を求める疑問法があり「モダリティが矛盾」して非文になる筈である。

3. * $\left\{ \begin{array}{l} \text{Has} \\ \text{Will} \end{array} \right\}$ John $\left\{ \begin{array}{l} \text{probably} \\ \text{certainly} \\ \text{evidently} \end{array} \right\}$ come? _____ Bellert

4. a. Have you perhaps misunderstood the question? _____ Bellert
 b. Can they possibly leave early? _____ Greenbaum

4の法副詞は蓋然性のひくいものであり、この場合には（この場所では）疑問法と矛盾しないのである。つまり中右の考えは蓋然性の高い法副詞についてのみあてはまり、つまり筆者の言葉で言えば「明確な態度を表明した」もののみにあてはまるものである。中右のここでの議論では「蓋然性の程度によ

るちがい」, とか「蓋然性のひくい法副詞」の場合とかが考慮の外にある。

1.1 心的態度の表現であるかどうかの峻別に使われる付加疑問はどんな性格をもったものなのか検討するために、以下付加疑問のさまざまな場合をあげてみよう。

1.2 最も普通の形で、例も一番多く見られるもので、前半が肯定の場合は否定の、否定の場合には肯定の付加疑問が付加されるもの。

5. 肯定—否定

- a. He likes his job, doesn't he?
- b. I may call on you Rollo, mayn't I? ____ *The Third Man*
- c. Well, you got your audience here, haven't you? ____ Screen English
- d. Kind of fresh, this Redfield, isn't he? ____ *Dream Girl*
- e. Well, we could get a couple beers, can't we? ____ *The Grapes of Wrath*
- f. But yer did want ter speak ter me, didn't yer Tom? ____ *Lila of Lanbeth*

6. 否定—肯定

- a. He doesn't like his job, does he?
- b. He is not at home, is he? ____ *Wuthering Heights*
- c. There's nothing else to live with except mendacity, is there? ____ *Cat on a Hot Zinc Roof*
- d. He didn't tell you to marry Dude, did he? ____ *Tobacco Road*
- e. Well, they're not a very exciting lot, are they? ____ *Ten Little Indians*

5, 6の付加疑問にはそれぞれ上昇調と下降調の場合がありうる。もともと音調はすぐれて話者の気持のもち方を表現する(したがって法表現の一つになりうることは筆者の一連の論文でのべてきた)が、上昇調は基本的に疑問であり、疑問文の色彩が濃く⁴⁾、聞き手が命題の真偽の決定することを予期して、相手の返答が続くことが多く⁵⁾自分の発言の確認を求めるものである。

一方、下降調では話し手の断定の気持がつよく働き、相手の反駁を拒否し、

その同意を当然のこととして期待する⁶⁾ という、命題内容に対するきわめてつよい明確な態度の表明である。「力」(force)⁷⁾ としてはもはや疑問ではなく自分の確信していることを確認するのであるから下降調も当然で疑問符を付けないことも多い。

法表現としてみると、上昇調の場合は前半が叙実法(平叙法, 直説法), 後半の付加疑問は「疑問法」(中右)となる。異った法表現が共存しても非文を作らないのは付加疑問の方が本来の「力」を失うからであろう。また下降調の場合は前半叙実法, 後半はその「力」が叙実法的であり非文をつくらないと言えよう。この種の付加疑問は確認を得ることを主とするので確認疑問(confirmative question)⁸⁾ともよばれるものである。

1.3 つぎは前半, 後半とも極性がおなじで, 肯定に対して肯定の, 否定に対して否定の付加疑問がつくものである。

7. 肯定—肯定

- a. It's you, is it.
- b. So I've got the wrong man, have I? ___ *Shane*
- c. You were really sorry for me, were you? ___ *Wuthering Heights*
- d. We'll go over by the eleven o'clock, shall we?
- e. Oh! men of the world, are we? ___ *My Fair Lady*
- f. It is you — is it, Jane? ___ *Jane Eyre*
- g. Oh, indeed! I'm mad, am I? ___ *My Fair Lady*

8. 否定—否定

- a. You haven't finished, haven't you.
- b. We'll gaze her and not please her — won't we, Jip? ___ *D. Copperfield.*

この種の付加疑問は極性がおなじことが最も大きな特徴で, 疑問符のない例からも想像されるように, Yes-no の返答を求める疑問文ではもはやない。下降調で話されることが多く⁹⁾ この種の付加疑問は相手が言ったことに対する話者の「評言疑問」(commentative question)ともよばれる。驚き, 不満,

皮肉¹⁰⁾などの反応をのべるものであることが多く、Oh, So などが文頭につき、「あ、(それで)～なのですか」に相当すると解される。形式的には平叙文、疑問文であるが、内容的には叙実法と叙実法的なものということになろう。

以上 5, 6, 7, 8 で見て来た例は前半の部分に応じて後半の部分の極性がきまるものであったが、つぎの 9, 10 のべるものは前半の形に関係なく付加される点で、すでに見たものと形の上では異なるものである。しかし機能的には付加疑問の一種と見ることができるもので、Quirk et al. では invariable tag question (不変化型加疑問) として扱われているものである。

9. They {forgot
didn't forget} to attend the lecture, {a. am I right?
b. isn't that so?
c. don't you think?
d. wouldn't you say?
10. She {passed
didn't pass} the exam, {a. right? <informal>
b. eh? /ei/ <casual, maybe impolite>
_____ Quirk et al.

11 として類例をあげる。

11. a. These are changed, don't you know.
b. Times are changing, mister, don't you know. _____ *The Grapes of Wrath*
c. There's a marathon a day, right?
d. You are pure and unspotted, right? _____ Screen English
e. Always the optimist, right? _____ *Raiders of the Lost Ark*
f. I mean, you make your living by killing wild life, correct?
_____ Current English
g. Frankies himself a gambler, huh? _____ *The Sting*
h. I bet you sleep with it, huh? _____ *Raiders of the Lost Ark*
i. You think it's simple, huh? _____ Screen English
j. But when you race, there's always the danger, no?
k. It was not part of our arrangement that Satipo and I do
menial labor, no? _____ Screen English
cf. l. Give me your blessing, father, please?

m. Please sit, please? ____ Current English

9, 10 の例はいずれも前半部の主語, 動詞の形に関係のない疑問の形が付加されており, 形式上は前半の叙実文に疑問がつづいている。前半の叙実法に対してもう一つ疑問法という態度が表わされている。なお Quirk et al. は 12. a, b のようなものも疑問の形でないにかかわらずここに入れてよいとしている。12. c として類例をあげる。

12. a. ~, you know.
- b. ~, I hope.
- c. Change is inevitable, you know? ____ Screen English
- d. How old you have to be, you reckon?
- e. No accident, I hope.
- f. When have I been harsh, tell me?
- g. He had a son, it seems? ____ 以上 *Wuthering Heishts*

以上のべて来たものを便宜的に形の上で整理するとつぎのようになろう¹¹⁾。

13. 付加疑問

変化型付加疑問 variant tag question	確認疑問—— confirmative question	{ 否定—肯定 肯定—否定
	評定疑問—— commentative question	{ 肯定—肯定 否定—否定
不変化型付加疑問 ____ am I right? you know? ... invariant tag question		

1.3 これまでとくに形の上から付加疑問のありうる場合をあげてみた。前半部は叙実法の平叙文でそれに付加疑問のついたものそのほとんどであった。以下ではこれ以外の文例で別の法の文の種類の点から考えてみることにする。

14. 命令文—付加疑問

- a. Open the door, won't you?/will you?
- b. Don't make a noise, will you?
- c. Hand me a knife, won't somebody?

- d. Open the door, can't you?
- e. Have another one, why don't you? ____ 以上 Quirk et al.
- f. Pass me the hammer, could you?
- g. Let's go to the cinema, shall we?
- h. Let's not/don't let's go today, shall we?/shan't we? ____ 以上
Hudleston
- i. You stop it, will you?

前半は命令文で命令法という法を表わしており、後半は疑問文によって聞き手の同意を得ようとしているから¹²⁾、一応聞き手に拒否の選択権を与えている¹³⁾。a についていえば won't you の上昇調は最も執拗 (insistent) でなく、will you の上昇調は最も執拗である。下降調の won't you は中間的である。また will you の下降調は無礼であるといわれている¹⁴⁾。こうしてみると前半部の命令につづけて後半部は聞き手から得たい同意に対する話者の気持をさまざまな程度に付加したかたちになっている。形が疑問でも「力」としてはそうでないことは疑問符を付さない¹⁵⁾ のような例でもわかる

15. Bring me a slab, will you/won't you!

なお後半の付加部分の助動詞が will にかぎらず can, could もあり、主語も you ばかりでなく somebody, somebody or other, one of you などがあること、さらに Why don't you などもあり、この例でも命令と質問両方の特性を示している¹⁶⁾ ことが知れることに注目しておこう。

16. 感嘆文一付加疑問

- a. How elegantly she dresses, doesn't she?
- b. What a row that machine makes, doesn't it? ____ Hudleston
- c. How THÌN she is, IŠn't she?
- d. What a beautiful PAÌN TING it is, isn't it [or don't you agree?]
- e. How odd, isn't it? ____ Quirk et al.

前半では命題内容の一部に対してつよい感情を表明する感嘆文であり、後半はそれに対する聞き手の同意を求めようとしたり¹⁷⁾、話者の感情をわけ合っ
てほしい¹⁸⁾ ことを示すものである。この種の文が単なる感嘆文と疑問文の

くみ合せでないことがつぎの 17 から明白である。

17. a. *Doesn't that machine make what a row?
b. *Doesn't she dress how beautifully?

感嘆と疑問の単なるくみ合せである 17. a, b は感嘆と疑問の衝突¹⁹⁾をおこなっている、つまり一つの文の中で話者の心的態度が一貫していない。前半の感嘆文は a であれば *She dresses very elegantly* という平叙文とおなじ「力」をもち、それに付加疑問がつづいたものと考えてもよい。

18. 疑問文—付加疑問

これについて稲木は「疑問文には付加疑問は後続しない」と言い切っているが、かならずしもそうではない。Hudson は彼の個人言語では quite impossible としながらも、アメリカ英語、オーストラリア英語の文献にあるとしてつぎの例をあげている。もっとも例が少いとコメントはさけてはいる。

18. a. Did he go there, did he?
b. How did he go there, did he?
c. Did John do it, was it?
d. Did John drink beer, did he?
d'. *Did John drink beer, didn't he? ____ 以上 Hudson
cf. e. Do you want to live? Do you? ____ Screen English

この種の付加疑問が不可能に思われるのは、返答を求めて一度自分の発した疑問に対して、それを補強すべく聞き手の同意を得ようとするのがそもそも不自然だからであろう。e の文と比較してみると単なるくり返しである文がコンマ誤用 (comma fault) で無終止文となったものとみてよいかも知れない。

1.4 以上みて来たことをふまえて付加疑問の特質を考えてみることにしよう。

英語では叙述内容に対する話者の心的態度、ないしはこれを示す文法手段である法を叙実法、仮定法、命令法の三つを区別し、文をその果す機能によって情報伝達を主とする平叙文、情報を求める疑問文、誰かに何かをするよ

うに指示する命令文、話者の感情の表出である感嘆文に区別する。すでに見て来たように付加疑問を導く前半の部分は平叙文、命令文、感嘆文である。前半で命題内容についてそれなりの心的態度の表現をしていながら、後半部で疑問によりもう一つの態度を表明している。しかし注意しなくてはならないのは、後半の付加疑問の部分は純粹に Yes-no の解答を求める疑問文であるよりは、むしろ前半部の意味に文字通り補足的に付加されたものであり、前半と態度的に全く対立するものではないということである。

17. a, b で見たように単一の文の中で感嘆文と疑問文というように種類のちがう法が入ることは出来ない。これはより一般化して言えば、一つの文の中に異なる心的態度の表現は生じ得ないということである。ここでは心理的に混乱がおこっており心的態度が一貫しておらず正常な発話とはなり得ないからである。いくつかの例を確認しよう。

19. a. *Did who go home?
- b. *Can John see Billy why?
- c. *I know that will you come?
- d. *If does he come, you will come. ____ 以上 Katz and Postal
- e. *I knew that cry and you cry alone.
- f. *I knew that were we (ever) in for it. ____ 以上 Green (1974)
- g. *Do you drink (?) and give me any way. ____ 今井ほか
- h. *The publisher told us when had he seen such a book. ____
Grimshaw
- i. *Are professors idealistic (?) and they enjoy poetry. ____ Lytle

つまり 20 のような予想をたてることができる。

20. 付加疑問が可能なのはそれがまず意味的に Yes-no の解答を求めるはっきりした疑問文として前半の部分にくみこまれているのではなく、あくまで前半の部分に補足的にそえられるかたちで付加されているからではないか。

以下このことを検討してみよう。

一般に主語と述語動詞を複数含む文、いわゆる重文、複文、重複文(混文)

にはそれらをつなぐなんらかの接続詞、または接続副詞のようなそれに類するものが要る。ところが現実にはつぎの 21 のように接続詞のない連辞省略文 (asyndeton) がある。

21. a. He came here, he had his interview.
- b. You are very kind to me, you've all been very kind to me,
I don't know what I've done to deserve it.
- c. I came, I saw, I conquered.

21 の文は接続詞がない、いわゆる無終止文 (run-on sentence) であるが、どの文も、とくに c の文で感じとれるように、テンポのはやい表現効果をもつものである。勿論この種の文は適当な接続詞を付すことも出来るし、場合によっては、c の文はピリオドで別の文としてしまうことも可能である²⁰⁾。付加疑問は形の上ではこの無終止文につながるものだと考えられる。以下その理由をいくつか考えてみたい。

付加疑問が無終止文の一種だと考えられる理由の一つめはつぎのようなものである。9, 10, 12. a, b であげた不変化型付加疑問 (22 としてくり返す) において、

22. a. They forgot/didn't forget $\left\{ \begin{array}{l} \text{am I right?} \\ \text{isn't that so?} \\ \text{don't you think?} \\ \text{would you say?} \end{array} \right.$
to attend the lecture,
- b. She passed/didn't pass the exam, $\left\{ \begin{array}{l} \text{right?} \\ \text{eh?} \end{array} \right.$
- c. ~, you know./I hope.

前半の文の主語、動詞とは全く別のものが付加疑問にでて来ることがあげられる。このことは 14 であげた文 (23 でくり返す) などで一層はっきりする。

23. a. Open the door, won't you?
- b. Hand me the knife, won't somebody?
- c. Turn on the right, will somebody or other?
- d. Save a seat, can one of you?
- e. Have another one, why don't you? ____ Quirk et al.

cf. f. Do you want to live? Do you? ____ Screen English

これらの文に見られるように前半の文の主語、動詞とちがう主語、動詞が付加疑問に出て来ることはおなじ主語、動詞の出て来る典型的な付加疑問と全く別の文として出て来る場合の中間に位置するものであることの裏づけとなる。

二つめの理由として 24 をあげることができよう。

24. a. A: Their daughter is very clever.
B: (Yes) Isn't she?
b. A: They are moving to New York.
B: Are they? ____ Quirk et al.
c. A: Alcoholic irritation was setting in.
B: Well, wasn't it? ____ *The Third Man*.

これらの B の文に見られるように付加疑問の部分は独立して表わされうる可能性があることもきわめて大きな特徴である。

さらに付加疑問が一つの別の文でありうる可能性を示す三つめの理由としてつぎの 25~28 の文をあげることができよう。

25. You can't whistle through it, now can you? ____ *Tobacco Road*
26. You wanna bust him, or don't you? ____ *The Sting*
27. We have been good friends; have we not? ____ *Jane Eyre*
28. a. It's here I look like Minna Davis. Isn't it? ____ *Fool for Love*
b. But Maria has been good. Has she not? ____ *For whom the Bell Tolls*
c. He's exactly like the son of the fortune-teller that stole my tame pheasant. Isn't he, Edgar? ____ *Wuthering Heights*
d. You haven't fallen in love with somebody else, have you? Have you? ____ Screen English
e. "That Dude is the luckiest man alive," he told Ellie May. "Now ain't he?"-*Tobacco Road*
f. A: "He hasn't much faith".

“Did Frank probably beat all his opponents?” の構造

B: “No,” the old man said. “But we have. Haven’t we?”

____ *The Old Man and the Sea.*

g. A: “It’s cheap and mischievous and mean.”

B: “Is it?” ____ *Come back, Little Shiba*

h. You love me Rama. Is that it? ____ *To a God Unknown*

cf. h’. And he does not reciprocate your feeling for him, is that
it? ____ *Dream Girl*

25 では now, 26 では or が間に入り, 27 では; で切れ付加疑問の独立性
がつよくなり, 28 の諸文は付加疑問の部分が別の文となってしまう。

また Bryant・桃沢は 29. a の文は b, c, d のように出来るという。

29. a. He came, he saw, he conquered.

b. He came, saw, and conquered.

c. He came; he saw; he conquered.

d. He came. He saw. He conquered.

29. d の文が c を仲介にして a の無終止文につながるように 28 の独立した
疑問文が 27 のようなセミコロンで接続された文を仲介にして前半の文とコ
ンマで接続する付加疑問につながるものであることはもはや疑いがない。こ
れで付加疑問の形式上の特徴はとらえ得たと思う。

1.5 つぎに心的態度の表現としての意味機能の点から付加疑問の特徴を
考えてみたい。

Hudson は平叙文—付加疑問について ‘...the meaning of the whole sen-
tence is the automatic consequence of the interaction between the mea-
nings of the declarative and the interrogative’ といってるように付加疑問
のついた文全体の意味は前半部と付加疑問の意味からなるが²¹⁾, すでに見た
ように, 後半の付加疑問は純粹の Yes-no の答を要求する疑問文であるより
はむしろ, 同意や確認を求めるという, 前半部に対する補足的な役割を果た
している。いま更にいくつかの例で考えてみよう。

30. a. You must be preacher Rice’s widow, ain’t you? ____ *Tobac-
co Road*

b. Little girl, a memory without blot or contamination must

- be an exquisite treasure — an inexchangeable source of pure refreshment, is it not? ____ *Jane Eyre*
- c. You do like them, don't you? ____ Screen English
- d. You do want to come, don't you? ____ Screen English
- e. It's true, isn't it, that you're thinking of giving up your job? ____ Quirk et al.
- f. It's true, isn't it, that sheep eat little bushes. ____ *The Little Prince*
- g. And he does not reciprocate your feeling for him, is that it? ____ *Dream Girl*
- g'. You love me, Rama? Is that it? ____ *To a God Unknown*
- h. I do not like him, do you? ____ Quirk et al.
- i. She doesn't want you to fuss about, do you, Sally? ____ *Of Human Bondage*
- j. Certainly, there has been regulation, hasn't there? ____ *A Common Language*
- k. That's what I said, didn't I? ____ Wakatabe
- l. It's difficult because most people aren't prepared to do anything about it, are they? ____ Wakatabe

a, b では前半で、その命題内容に対して must という蓋然性のたかい心的判断をしておりますながら、一方ではそれに同意を求める付加疑問が付されてある。また c, d では do といういわゆるつよめの表現をしていながら、それを確認すべく、付加疑問をつけている。e, f では It's true といいながら、それにすぐ付加疑問を付して問いかけ、微妙な気持の動きが表わされている。h, i は Ball and Wood がいう false tagging であって、ここではそれぞれ前半では I, she についてのべておりながら、後半では直接相手に対して、「ところであなたはどうか」と Yes-no をはっきり問うという形になっており、いかにも二つの文を接続詞なしで接続したということがわかる。j は 2 の文で下降調でないかぎり非文とされた種類のものである。前半では命題内容に対してははっきり certainly というたかい蓋然性の態度を明確に示しているが、あとでそれを追うように、それに対して確認を求める付加疑問が付されており、テンポのはやい話し言葉の中で時間と共にかわる気持の動きが感じとれ

る。k, l はいずれも前半の主節に対する付加疑問ではない。しかし構造上一番伝えたい新情報の来る部分に対する付加疑問がつけられ、それを確認している。これらもやはり時間の流れにそった気持の動きを感じさせる。

このようにして見ると前半と付加疑問である後半部とは話者の気持のもち方がもともと同一ではないがそれが全体として非文をつくらないのは、付加疑問の部分が機能的には前半の部分と並列におなじ比重であるというよりむしろ、前半の部分の意味を何らかのかたちで修正し、補足するというあくまで従的な働きにとどまるからだと思われる。

Green (1975) は 31 の文は tag のない 32 の文と「力」がおなじだというのが、

- 31. a. I'll help you, I promise.
b. Who did John invite, I wonder.
c. Is John here, do you suppose?
d. I defended you, I swear.
- 32. a. I'll help you.
b. Who did John invite?
c. Is John here?
d. I defended you.

これは tag が意味的にも機能的にもないに等しいというのではなく、文全体のもつ働きがおなじだ、といっているのと全く同様な意味で、30 のもろもろの文は全体として一つの「力」をもっているから、前半と異った心的態度を示す部分をその中にもっていながら非文にならないのである。つまり、

- 33. 形式的には本来別の文であるものが接続詞なしで、いかにも前の文の一部であるかのように付加されたものであり、意味的にはもう一つの心的態度を含むものでありながら、これも前半の文に対立するよりはむしろ前半の部分の意味を何らかのかたちでつよめたり、弱めたり修正する (modify) する。

というのが、本来異った文でありながら全体で一つの文として機能するという中間的な性格をもっているのが付加疑問の特徴であると言える。

接続詞のない終止文がテンポのはやい文に適するということは、付加疑問

が口語に多いということと直接関連することであって、これを無視することはできない。話し言葉であれば、命題(叙述)内容に対する態度が明確でない²²⁾まま話しはじめたり、又話しはじめに一定の態度を示しておきながら後半でそれを修正するということはきわめて自然である。付加疑問の特質、存在理由はまさにこういうところにあるというべきであって、時の流れにふかく影響される話し手の変りやすい、不安定な場合の心的態度のダイナミックな表現としてはなくてはならないものである。心的態度がつねに明確かつ不変なものであり、しかもそれを時の流れとかかわりない固定的にとらえようとするならばそれは言葉のいかにも一面的なとらえ方と言わざるを得ない。言葉の最も大きな特徴である線条性とは時間的であることと同義のはずである。付加疑問が法表現とそうでない表現を区別する「強力」な基準になりうるとは思えない。

2.0 言語表現は客観的な側面をもつものであると同時にすぐれて主観的な性格をもつものであり、前者が命題であるとすれば後者は話者の心的態度を表わす法表現といわれるものである。英語には直示的 (deictic) な表現があり、これは話者中心の表現である。here, there, now, then などの副詞と共に come, go などの動詞も又話者を中心としたもので直示的動詞といわれる。時の表現たる時制も又話者の立場が如実に現われるものである。客観的、物理的な時間は話者を通して時制として表現されるが、時間と時制は本来全く別のものであり、直接的な関係はない。物理的な時間としての発話時(これは瞬間にすぎ去るものであり、現実には「今」は巾をもつものとされるが)「現在時制」で表現され、物理的時間の過去の出来事が「過去時制」で表現されるのはそれが最も一般的であるから、というにすぎない。物理的時間で未来のことであれ、話者によって「今」的に認識され、表現されれば、それは「現在時制」になるはずで、そこに何らの不条理さはない。われわれがそこから知ることができるのは、話者はその時、表現しようとする事態、事柄を「今」的に認識して表現したということである。(なぜ「今」的に認識したか、については、話者として客観的な立場を失っていたというような理由もありうるが、別のことである)。

2.1 さて、ここではとにかく問題の多い *Sir Gawain and the Green Knight*²³⁾ の時制について考えてみたい。論点はただ一つ、この作品の中の当然過去であるべきところが現在時制で表現され、それが現在から過去に変わることにについてである。

Turner は ‘Modern readers of *Sir Gawain and the Green Knight* are apt to find its tenses haphazard’²⁴⁾ とこの作品の時制が ‘でたらめ、ゆきあたりばったり’ であるとのべている。

彼は 1. a の原文に時制をそのままにした 1. b のような訳を与え、また、これを慣用的な近代英語 (idiomatic Modern English) にするには、分詞をつかって 1. c のようにする以外に方法はない、という。

1. a. Bi þat þe wyȝe in þe wad wendeȝ his brydel,
Hit þe hors with þe helez as harde as he myȝt,
Lepez hym over þe launde, and leuez þe knit pere
al one. 2152-3

- b. Thereupon the man in the woods turns his bridle,
hit his horse with his heels as hard as he might,
races over the clearing and leaves the knight there alone.
- c. Thereupon the man in the woods, turning his bridle,
hit his horse with his heels as hard as he could,
racing over the clearing and leaving the knight there alone.

なおこの個所に限って、いくつかある現代語訳のうち特長的なものを二つあげる。2. a では現在時制で統一されており、2. b では過去時制で統一されて訳されている。

2. a. With that his bridle towards the wood back the man turneth,
hits his horse with his heels as hard as he can,
gallops on the green way, and the good knight there leaves
alone.²⁵⁾
- b. Whereupon he wrenched at his reins, that rider in the woods,
Hit the horse with his heels as hard as he could,

Sent him leaping along, and left the knight there

Alone.²⁶⁾

1. a, b で見るようにこの引用部分は *wendez* (turns) という現在時制ではじまり, *hit* (hit), *myȝt* (might) と過去時制がつづき, また *Lepez* (races), *leuez* (leaves) という現在時制で終る。

1. c では現在分詞でたくみに時制の問題はさけられており, 2. a, b では原文の時制の不統一はさけられている。しかしここでは原文のもつ重要な部分が失われているはずである。また原文の時制のこのような交替は「過去の出来事を眼前に起っているように生き生きと描写する」²⁷⁾ という「歴史的現在」では説明つきにくい。以下この時制のかわり方を中心に検討すすめていくことにする。

2. 2 2530 行におよぶこの作品を通してみると, 1. a にあげたように 1, 2 行ごとに見えなくとも時制が交替するわけではなくほとんどは過去時制で表現されていることをまず指摘しておかなければならない。また時制の変るところでもその変り方はかならずしもおなじではない。この作品は過去の出来事を直接引用を含めて語る形で進んでいくので基本的に地の文は過去時制で表現されるはずであるが, それがそうとはならず, 現在時制で表現されている, その変り方が問題の焦点となるわけで, とくにその点に注目して用例を見ていく。

3. a. Wyle Nw 3er watz so 3ep þat hit watz nwe cummen,
 þat day double on þe dece watz þe douth serued.
 Fro þe kyng watz cummen with knyȝtes into þe halle,
 þe chauntré of þe chapel cheued to an ende,
 Loude crye watz þer kest of clerkez and oper,
 Nowel nayted onewe, neuened ful ofte;
 And syþen riche forth runnen to reche hondeselle,
 3ezed 3eres-ȝiftes on hiȝ, ȝelde hem bi hond,
 Debated busily aboute þo giftes;
 Ladies laȝed ful loude, þoȝ þay lost haden,
 And he þat wan watz not wrothe, þat may ȝe wel trawe.

60-70

(While New Year was yet young that yestereve had arrived,
that day double dainties on the dais were served,
when the king was there come with his courtiers to the hall,
and the chanting of the choir in the chapel had ended.
With lond clamour and cries both clerks and laymen
Noel announced anew, and named it full often;
then nobles ran anon with New Year gifts,
Handsels, handsels they shouted, and handed them out,
Competed for those presents in playful debate;
ladies laughed loudly, though they lost the game,
and he that won was not woeful, as may well be believed.)

- b. Hit watz þe ladi, loflyest to beholde,
þat droȝ þe dor after hir ful dernly and style,
And boȝed towarde þe bed; and þe burne schamed,
And layde hym down lystyly, and let as he slepte;
And ho stepped stilly and stel to his bedde,
Kest vp þe cortyn and creped withinne,
And set hir ful softly on þe bed-syde,
And lenged þere selly lange to loke quen he wakned.

1187-94

(It was the lady herself, most lovely to see,
that cautiously closed the door quietly behind her,
and drew near to his bed. Then abashed was the knight,
and lay down swiftly to look as if he slept;
And she stepped stealthily and stole to his bed,
Cast up the curtain and sweetly crept within
And set her full softly on bed-side,
And long lingered there looking lovingly upon him.)

この作品の多くの部分はこのように過去時制でのべられていく。3. a, b はその意味では一番自然な表現であり問題がないところである。話者は過去の事柄を客観的にうけとめ、距離をおいた位置から心のもち方を変えず淡々と表現している。and などを多用し事件が起きてゆく順に語りつづけてゆく。問題となるのは直接引用の個所以外に確実に過去の出来事であるのに現在時

制で表現されている個所があり、特にそれが過去時制と頻繁に交替することである。つぎにこの例をみる。

4. a. After þe sesoun of somer wyth þe soft wyndez
 Quen Zeferus syflez hymself on sedez and erbez,
 Wela wynne is þe wort þat waxes þeroute,
 When þe donkande dewe dropez of þe leuez,
 To bide a blysfyl blusch of þe bryzt sunne.
 Bot þen hyzes heruest, and hardenes hym sone,
 Warnez hym for þe wynter to wax ful rype;
 He dryues with drozt þe dust for to ryse,
 Fro þe face of þe folde to flyze ful hyze;

516-24

(After the season of summer with its soft breezes,
 when Zephyr goes sighing through seeds and herbs,
 right glad is the grass that grows in the open,
 when the damp dewdrops are dripping from the leaves,
 to greet a day glance of the glistening sun,
 But then harvest hurries, and hardens it quickly.
 warns it before winter to wax to ripeness.
 He drives with his drought the dust, till rises
 from the face of the land and flies up aloft;)

- b. And syþen boʒez to his blonk, þe brydel he cachchez,
 Steppez into stelbawe and strydez alofte,
 And his hede by þe here in his honde haldez;

434-46

(And then hastens to his horse, lays hold of the bridle,
 steps into stirrup-iron, and strides up aloft,
 and his head by the hair in his hand holds;)

- c. Ho comes nerre with þat, and cachez hym in armez,
 Loutez luflych adoun and þe leude kyssez.
 þay comly bykennen to kryst ayþer oþer;
 Ho dos hir forth at þe dore withouten dyn more;

(She draws near with that and softly she seizes him;
Bends blithely down, and boldly she kisses him.
Then comely they commend one another to Christ
And she slips from the room without rustle or ripple;)

まず 4. a の現在時制の表現はまだつづくのだが、自然を描写したものであり、これはこれとして一般的なことをのべているから現在時制で表現するのは特別問題視すべきものでもない。b, c は過去の事柄を表わしており、前後を過去時制で表現しており、この部分が時制が現在になっている。「歴史的現在」という用語はこういう個所に値いするかも知れない。しかし実はこれはつぎの 5, 6 のような例との関係で考えなくてはいけない。少しながいがつぎの文を見てみよう。

5. When Gawayn glyȝt on þat gay, þat graciously lokȝd,
Wyth leue laȝt of þe lorde he lent hem aȝaynes;
þe alder he haylses, heldande ful lowe,
þe loueloker he lappez a lyttel in armez.
He kysses hir comlyly, and knyȝtly he meleȝ.
þay kallen hym of aquoyntaunce, and he hit quyk askez
To be her servaunt sothly, if hemself lyked.
þay tan hym bytwene hem, wyth talkyng hem leden
To chambre, to chemné, and chefly þay asken.
Spyceȝ, þat vnsparely men spedȝd hom to bryng,
And þe wynnelych wyne þerwith vche tyme.
þe lorde luflych aloft lepez ful ofte,
Mynnȝd merthe to be made vpon mony syȝȝ,
Hent heȝly of his hode, and on a spere hengeȝ,
And wayned hom to wyne þe worchip þerof,
þat most myrȝe myȝt meue þat Crystenmas whyle —
‘And I schal fonde, bi my fayth, to fylter wyth þe best
Er me wont þe wede, with help of my frerȝȝ.’
þus wyth laȝande loteȝ þe lorde hit tȝȝt makeȝ,
For to glade Sir Gawayn with gomȝȝȝ in halle

pat ny3t,

970-990

(When Gawain glimpsed that gay lady that so gracious looked,
 with leave sought by the lord towards the ladies he went;
 the elder he saluted, low to her bowing,
 about the lovelier he laid then highly his arms
 and kissed her in courtly wise with courtesy speaking.
 His acquaintance they requested, and quickly he begged
 to be their servant in sooth, if so they desired.
 They took him between them, and talking they led him
 to a fireside in a fair room, and first of all called
 for spices, which men sped without sparing to bring them,
 and ever wine therewith well to their liking.
 The lord for their delight leaped up full often,
 many times merry games being minded to make;
 his hood he doffed, and on high he hung it on a spear,
 who the most fun could devise at that Christmas feast —
 'And I shall try, by my troth, to contend with the best
 ere I forfeit this hood, with the help of my friends!'
 Thus with laughter and jollity the lord made his jests
 to gladden Sir Gawain with games that night in hall.)

水鳥が「一連の叙述が一つの Tense によって統一されない場合が圧倒的に多いのである」というのはすでに見た例からかならずしも正確でないと思われるが、5 にあげた例はその典型的な例でおなじ時制が数行とつづかない。時制の変更の最もはなはだしいのはおなじ行の時で時制をかえる 6 のような場合である。目につくものをあげてみる。

6. a. Wyth þis he lazes so loude þat þe lorde greued; 316
 (With that he laughs so loud that the lord was angered;)
- b. Ly3tly lepez he hym to, and la3t at his honde. 328
 (Quick then he leaps to him and caught it from his hand.)
- c. Kneled down bifore þe kyng, and cachez þat weappen; 368
 (Kneeld humbly before his highness, and lays his hand on
 the weapon;)

*Did Frank probably beat all his opponents? の構造

- d. And gef hym Goddez blessyng, and gladdly him biddes 370
(and gave him God's blessing, and graciously enjoins him)
- e. So harnayst as he watz he herknez his masse, 592
(Thus harnested he was he hears now his Mass,)
- f. þe lorde charred to a chambre, and chefly cumaundez 850
(To a chamber the lord drew him, and charges men at once)
- g. Gawan gef hym god day, þe godmon hym lachchez, 1029
(good-day then said Gawain, but the goodman stays him)
- h. Lurkkez quyl þe daylyzt lemed on þe woves, 1180
(lazes, till the walls were lit by the light of day,)
- i. 'Querfore?' quop þe freke, and freschly he askez, 1294
(‘Why so?’ said the knight, and then eagerly he asks,)
- j. Bot in þe hast þat he myzt he to a hole wynnez 1569
(But in such haste he might he makes for a hallow)
- k. He gete þe bonk at his bak, bigynez to scrape, 1571
(He put the bank at his back, begins then to paw,)
- l. When he seze Sir Gawayn, with solace he spekez; 1624
(gaily he greets him when Gawain he saw)
- m. He hent þe hapel aboute þe halse, and hendely hym kysses,
1639
(He clasped his neck, and courteously a kiss he then gives him)
- n. Miry watz þe mornynge, his mounture he askes. 1691
(Merry was the morning. For his mount then he calls.)
- o. 'Hat at þe penne!' quop þat oþer, and heuez hit alofte, 2288
(‘Have at thee then!’ said the other, and heaves it aloft,)
- p. Gawayn graypely hit by dez, and glent with no membre, 2292
(Gawain warily awaits it, and winced with no limb,)
- q. þenne he kazt to þe knot, and þe kest lawsez, 2376
(He took then the treacherous thing, and unties the knot)

5 で見たように一つの節 (fit) の中で時制が現在、過去と交替してあらわれる例と 6 の例のように一行の中でさえ交替する場合の間にはさまざまな時制の変り方の例がある。おなじ場面ですらいく度も時制が変わるのであるから、もはや「場面を生き生きと描写する」という「歴史的現在」では説明しにくい。時制とはなにか、にたちもどって見なおさなくてはならない。

あらたな検討に 6. a~q であげた例の時制の移動をつぎのように表わしてみよう。(→は時制の移動の方向を表わす。それにのせて書きこんであるのは移動の途中に見られる句読点、接続詞である。動詞の前には意味上の主語をあげてある。あげてない場合はもう一方の動詞とおなじことを示す。)

現在時制

過去時制

7. a. (G. Knight) lazes (laughs) ~~that~~→ (Arthur) greved (was angered)
- b. (Arthur) lepez (comes) →~~and~~→ la3t (caught)
- c. cachez (catches) ←~~and~~ (Gawain) kneled (kneeled)
- d. biddes (enjoins) ←~~and~~ (Arthur) gef (gave)
- e. herkenes (hears) ←—— (Gawain) watz harnayst
- f. commaundez (charges) ←~~and~~ (lord) charred (drew)
- g. lachchez (stays) ←—— (Gawain) gef (gave)
- h. (Gawain) Lurkkez (lies) ~~while~~→ (light) lemed (was lit)
- i. askez (asks) ←~~and~~ (Gawain) quop (said)
- j. wynnes (makes for) ←~~and~~ (Gawain) my3t (might)
- k. bigynes (begins) ←—— (lord) gete (put)
- l. spekez (speaks) ←—— (lord) seze (greeted)
- m. kysses (kisses) ←~~and~~ (Gawain) lente (clasped)
- n. askes (calls) ←—— (morning) watz miry (merry)
- o. heuez (heaves) ←~~and~~ (G. Knight) quop (said)
- p. (Gawain) bydez (awaits) →~~and~~→ glent (winced)
- q. lawsez (unties) ←~~and~~ (G. Knight) ka3t (took)

これをさらに時制と主語の移動だけに限って 8 として表わしてみる。

8. a. G. Knight → Arthur
- b. Arthur → Arthur
- c. Gawain ← Gawain
- d. Arthur ← Arthur
- e. Gawain ← Gawain
- f. lord ← lord
- g. Gawain ← Gawain
- h. Gawain → light
- i. Gawain ← Gawain
- j. Gawain ← Gawain
- k. lord ← lord
- l. lord ← lord
- m. Gawain ← Gawain
- n. lord ← orning
- o. G. Knight ← G. Knight
- p. Gawain → Gawain
- q. Gawain ← Gawain

7, 8に見た一行内での時制の移動からどういうことがよみとれるであろうか。「歴史的現在」には動的な動詞が多いというがここで見るかぎりこの点をはっきりしない。しかしおよそつぎの三つのことははっきりよみとることができる。

- ① ほとんど (17 中 14) が同一主語であること。主語がちがえば場面が変わったということが出来るかも知れないが実はそうではない。
- ② 現在時制をとるのは Gawain が圧倒的 (17 中 9) であること。つぎに lord, G. Knight とつづく。
- ③ 過去時制から現在時制に移動する例 13 のうち 12 は同一主語 (うち 7 は Gawain) であり、しかも and あるいは , and で移行するものが 8 であること。

まず①では主語がちがえば場面が変わるということ、つまり場面が変わっ

たために時制がかわったと考える可能性が少いことがわかる。②は Gawain が主要な登場人物であることから「歴史的現在」との関係を予想されるが、どの程度正しいものであろうか。③については、and には明白に、「時間的に後」の意味がある²⁸⁾から、これからするとこの場合の現在時制は、時間的にあとに起った、ということの意味するのかも知れない。この様な観察は作品全体からみた時どのくらいの正当さをもつものであろうか。一行内で時制をかえる特殊な場合にすぎないのであろうか。このことを確かめるために、以下では、数行のうちで時制をかえる場合をとりあげてみることにする。(便宜上、原文、現代語訳をはぶき、要領は 7, 8 に従う。)

現在時制		過去時制	
9. a. (Arthur) byholdez (beholds)	→ and →	reuerenced (saluted) 250-1	
b. (Arthur) lepez (G. Knight) lyztis (dismounts)	→ and → ← then	la3t (grasped) 328-9	
c. cachez (catches)	← and ← ; and →	(Gawain) kneled (kneeled) (Arthur) laft (left) lyfte (lifted)	
biddez (asks)	← and ←	gef (gave) 867-70	
d. (G. Knight) discoverez	→	layd (laid) 418-9	
e. bo3ez (omes to) cachchez steppez strydez haldez	← and ← ; and →	(G. Knight) la3t (caught) lyft (lifted) sette (set) 433-7	
f. (G. Knight) tornez (turns)	→	halled (hastened) 457-9	
g. (Gawain) melez (talks) spekez (speaks)	← and ← → and →	(Many) maden (made) sayde (said) 542-4	

- | | | | | |
|----|----------------------------|---------|------------------------------------|--------|
| h. | (Gawain) dowelez (remains) | | | |
| | ↓ | | | |
| | dressez (prepares) | | | |
| | ↓ | | | |
| | askez | →, and→ | (arms) were brozt (brought) | 566-7 |
| i. | (Gawain) Comes | | | |
| | ↓ | | | |
| | Lachez (takes) | →. And→ | (lords and ladies) kyst | |
| | | | ↓ | |
| | | | conveyed | |
| | | | (escorted) | 594-6 |
| j. | (Gawain) hentes | ← | (things) glytered, glent | |
| | ↓ | | | |
| | kysses | → | (helmet) watz stapled | |
| | | →, | (fastened) | 604-6 |
| k. | (Gawain) is gay | →, and→ | la3t (took) | |
| | | | ↓ | |
| | | | gef (gave) | |
| | | | ↓ | |
| | | | wende (thought) | 666-9 |
| l. | rydez | ↙, ↘ | (Gawain) ouerclambe
(clambered) | |
| | | | ↓ | |
| | | | passed | |
| | | | ↓ | |
| | | | fonde (found) | 713-6 |
| m. | (brook) rennez (runs) | →, and→ | hengez (hang) | 731-2 |
| n. | | | (Gawain) gly3t (saw) | |
| | | | ↓ | |
| | | | (lady) loked (looked) | |
| | lappez (embraces) | ←, → | (Gawain) la3t (caught) | 970-4 |
| | ↓ | | | |
| | kysses | | | |
| | ↓ | | | |
| | melez (speaks) | | | |
| o. | buskez (makes haste) | ↙, ↘ | (lord) ete (ate) | |
| | | | ↓ | |
| | | | (light) lemed (shone) | 1135-7 |
| p. | (Gawain) heuez (lifts) | →, ↘ | ca3t (caught) | |
| | | →, and→ | | |
| | waytez (glances) | ↙, ↘ | (it) mi3t (might) | 1184-7 |

- (some people) britned
(slit open)
|
brayden (pulled)
- q. bigynez (begins) ←, and—
|
ryuez (divides)
|
voydez (takes out)
|
lance (loosen) 1339-43
- r. (lord) launces (dashes)
|
blowez —, → rechated (blew)
|
rode
←, (sun) schafted (set) 1464-9
- (men) dryven
(lady) lys (lies)
- s. (lady) comes
|
totes (gazes) —, → (Gawain) welcumed
|
, and
(lady) 3eldez (gives)
|
settez (sets)
|
la3et (laughs) —, and → layde (laid) 1476-80
- t. (Gawain) rupes (rouses)
|
ryses —, and → (dinner) watz dyzt
(prepared)
(Gawain) layked (engaged)
|
swe3 (pushes) ←, (lord) launced (rushed)
(swine) sweyngez (rushes) —, → bote (cut into pieces) 1558-64
- u. (lord) merkez (strikes) ←, and → (swine) hade (had)
|
set
- v. (Gawain) lis (lies)
|
slepes
|
kepes (keeps) —; → watz di3t (dressed) 1686-9
- w. (dog) kryes (cries)
(hunter) calles (calls) —; → (fellows) fallen (followed)
|
fnasted (panted)
|
(fox) fyskez (moves quickly) ←, and — runnen 1701-4

x.	swenges (dashes)	←, —	(lady) com (Gawain) keuered (regained)	
	swares (answers)	—, —	com felle (fell)	
	(Gawain) welcumez	←, —	kyssed	1755-8
y.	(lady) seueres (separates)	←, and —	(lady) swe3e (stooedp) kyssed	1796-7
	says			
z.	abides (expects)	←, and —	(lord) watz war (wary)	
	braydez (draws)			
	castes (strikes)	—, And →	(fox) schunt (shrunk)	1900-2
a'.	(lord) ly3tez (lights)	←, —	(dogs) fel woried (worried)	
	lachez (seizes)			
	haldez (holds)			
	halowez (shouts)	—, —	(hunters) hy3ed (hastened)	1904-10
b'. (New Year)	ne3ez (nears)			
	(night) passez			
	(day) dryuez (follows)	—, —	(weathers) wakned (acroused)	
	lowkez (closes)	←, —	(clouds) kesten (sent forth) (Gawain) le3 (lay)	1997-2007
c'. (Gawain)	steppiez			
	strydez	—, —	(servant) schewed (showed)	
	gordez (puts spur)	←, —	(Gawain) la3t (laid)	
	startez	—, —	stod	2060-3
d'. (servant)	wendez (direct)s	—, —	hit	
	lepez (gallops)	←, —	my3t (might)	2152-4
	leuez (leaves)			

e'. (G. Knight) wan
 |
 nolde (would not)
 |
 hypped (hopped)
 |
 watz brode 2231-3

strydez (drives) ← and →

f'. braydez (draws) ←, (Gawain) schot
 |
 spekez → watz 2318-21

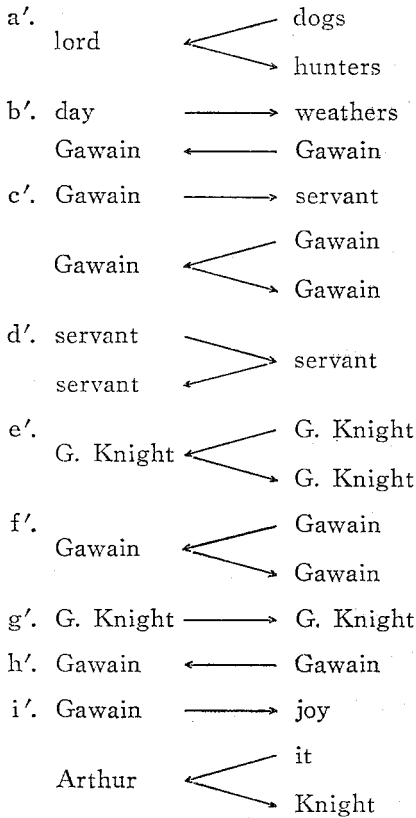
g'. (G. Knight) melez (speaks), and → sayde 2336-7

h'. (Gawain) quop (said)
 |
 hatz ←, and → sesed (seized)
 |
 ponkkez (thanks) 2407-8

i'. (Gawain) commes → (joy) wakned (aroused)
 |
 (Arthur) wist (knew)
 |
 (Arthur) kyssez ← (it) þoʒt (thought)
 |
 ; and → (Knight) soʒt (sought) 2489-93

10. a. Arthur → Arthur
- b. Arthur ↘ Arthur
 G. Knight ↙
- c. Gawain ↘ Gawain
 Gawain ↙ Arthur
- d. G. Knight → G. Knight
- e. G. Knight ↘ G. Knight
 G. Knight ↙
- f. G. Knight → G. Knight
- g. Many (people)
 Gawain ↘
 Gawain ↙
- h. Gawain → arms
- i. Gawain → lords and ladies
- j. things
 Gawain ↘
 helmet ↙

- k. Gawain → Gawain
- l. Gawain ↗ Gawain
↘ Gawain
- m. brook → brook
- n. Gawain ← Gawain
- o. lord ↗ lord
↘ light
- p. Gawain ↗ Gawain
Gawain ↘ it
- q. some people ← some people
- r. lord ↗ lord
men ↘
- s. lady ↗ Gawain
lady ↘ lady
- t. Gawain → dinner
lord ← lord
swine → swine
- u. lord ↗ swine
↘ lord
- v. Gawain → Gawain
- w. hunter ↗ fellows
fox ↘
- x. lady ↗ lady
↘ lady
Gawain ↘
- y. lady ← lady
- z. lord ↗ lord
↘ fox



主語と時制の移動を示すところになる。

9, 10 からどんなことをよみとることができるであろうか。

まず8のような一行中でみられたような過去から現在の時制への移動が優勢であるかどうかということは9, 10 では一行中という限定がないのでおなじレベルで比較はできないことは明確にしておこう。

本来われわれが問題にしているような時制の移動は、動詞の種類にその特色が見られることはよく指摘されることで、たとえば水鳥はつぎのように言う。

11. preterite Tense に移るのは、一連の叙述において、present tense で表現されていた先行の動作とは異質の動作に移る場合であり、描写の上からいうと、主語の表わすものの動的な状態 ('Durative') の描写

から、停止した状態の動（‘Terminative’）作の描写に移る場合、それ故、描写の上で一連の動作の continuity の中に段落がみられる場合、さらには先行の動詞にはその動作の具体的な方向が明らかでないのだが、preterite Tense の動詞に表現される具体的な方向が明らかになる……という理解が可能であると思われるのである。特に、Tense の移行が接続詞をはさんで行なわれる場合……には、このような continuity の断絶がはっきり伺われると思う。（下線引用者）

とのべて、現在、過去の時制の移動は異質の動作への移動である、とする。これは予想されることであり、一般に認められていることでもある²⁹⁾。

しかしそれが典型的にでていると思われる場合、7, 8 にあげた動詞を見ても実はこのことはあまり判然としない。おなじ行の時制のちがう二つの動詞の主語は 17 例中 14 おなじものであり、しかもその中の 8 例は接続詞 and をもっている。これは水鳥の主張に反する。しかも 7. e, 7. h は二つの行動が同時的であるとさえ思えるのに時制がちがう。7. k のように se3e (said), と spekez (speaks), 7. i の quop (said) と askez (asks) は動作としては似たものだと思うのだがこれをも別の動作というのであろうか。

またこの 9 の個別的な動詞に限って見るかぎり、ここに出て来る動詞の種類によっては現在時制と過去時制が静的とか動的とかによって明確に区別することはできないようである。つまり時制の移動は時制の交替する個所、その動作のみをみたのでは、その理由は明らかにならないと思われる。時制の変化は何によるのであろうか。

9 にあげた現在時制の動詞、過去時制の動詞に、それぞれ動的とか静的とかという特徴を認めることは出来ないが、主語をつけ、時制の移動を示す 10 を見るとここには確実につぎのことを読みとることができる。

- ① 現在時制の方に出て来る主語 40 のうち 19 が Gawain, 6 が G. Knight 4 が lord, 2 が lady である。Gawain が圧倒して多く、ついで G. Knight となる。（これは作品の題名 *Sir Gawain and the Green Knight* と対応する。）またこの数は作品の全体を通じて各場面に登場するその時の主要

人物とも一致するようである。

- ② 現在時制をとる主語の最初から終りまでの配列はそのまま、まさしくこの作品の展開の過程の、その場その場で主要な役割を果す登場人物の配列である。現在時制をとる主語は確実に物語の内容の流れを反映している、と考えることができる。

①、②からこの作品の現在時制についておよそつぎのような一応の特徴づけができるように思う。

12. この作品の現在時制は、筋の展開の過程とその各場面における主要な人物の行動を反映している。

つぎにわれわれは筋の展開、主要人物と時制の関係を考えなければならない。

2.3 まず「時制」とはなにかざっと見ることにする。

時制はもともと表現しようとする事柄、叙述内容の認識とその表現の仕方にかかわるものであって、物理的な時間をそのまま表現するものではない。未来時制でも現在時制でも表現できる近い未来の例をあげるまでもなく、表現しようとする内容をどう認識し受けとめているかが問題となる。おなじ物理的に過去の出来事であってもそれをすでに過ぎ去ったことと認識し、そう表現すれば過去時制となり、目の前に起っているようにありありと現在のこととして受けとめ表現すれば現在時制となる。物理的時間で現在のことを現在時制で表現するのはそれが最も一般的であるからにすぎない。時制は話し手がある表現しようとする事態・事柄をどう認識し受けとめているか、どう見てどう表現したかが如実に示されるものだと言えよう。このように時制はすぐれて認識の仕方の問題なのであって、そこには話し手のものの見方、気持のもち方が、意図する、しないにかかわらず明確に出て来る。このような立場から考えてみることにしよう。

さて、この認識であるが、われわれの認識の仕方にはつぎのような特質があることがたしかめられている。たとえば、二人の向いあった横顔の絵を顔と見るか、またその間のブランクの部分に注目して花びんと見るか、どちら

も可能である。自然とどちらかに見ていることもありうるし、意図的にどちらかに見ることもできる。何らかの理由でどちらかが浮き出して、いわゆる figure (他の部分は ground) となって foreground に出て来る。Langacker はわれわれの認識力について、ある構造表示の下位構造に注意をむける力であり、一つの場面に figure と ground をあてはめる力であるといっている。たとえば a man walking a dog, a dog walking a man で前者では man が、後者では dog が figure であるという³¹⁾。

われわれの認識の中では、このようにある場面からその一部にとくに注意をむけその部分を浮きたたせた形で認識することが知られる。

ではわれわれの認識の中では一体どのような部分が figure となって前景に出て来やすいのであろうか。まず思いあたるのは gestalt についての考え方であろう。

たとえば Reinhart は①連続したものが foreground になりやすい (good continuation), ②小さな範囲のものが figure になり広いものが background になりやすい (size and proximity), ③閉じたものが figure と知覚されやすい (closure) という gestalt の原則を直接的に利用して、大きく三つの基準 (criteria) をあげている³²⁾。

13. a. 時間的基準 (Temporal criteria)
- b. 機能依存の基準 (Functional-dependency criteria)
- c. 文化依存の基準 (Culture-dependent criteria)

そして 13. a, b, c のそれぞれの基準について、具体的に 14, 15, 16 をあげている。

14. a. 「物語性」あるいは時間的連続性 ('Narrativity' or temporal continuity)
narrative units だけが foreground になる
- b. 定時性 (punctuality)
定時的な出来事を伝える部分が foreground になる
- c. 完結性 (completeness)
完了した出来事は foreground になりやすい

15. a. 法性 (modality)
法的命題 (modal proposition) や否定命題は background
- b. 因果性 (causality)
原因は background として表わされる
16. a. 意味的な重さ (semantic load)
より顕著で普遍的, 重要であると考えられるものが foreground になる傾向がある
- b. ジャンルあるいは慣習 (genre or convention)
ジャンル, 文学上の慣習には foreground になりやすい鍵になる出来事が要ることがある

この種のものでは網羅的なのであげてみたが整理すると 17 のようになるう。

17. foreground	background
narrative units	
punctual events	durative, repetitive, habitual events ³³⁾
completed event	ongoing event
	modal, negative proposition
(result)	cause ³⁴⁾
more outstanding,	neutral events
universal, important events	

なお Wallace もおなじ発想でつぎのように整理している³⁵⁾。

18. foreground	background
more important envents of narrative	events of lesser importance
more important steps of procedure	subsidiary procedure
central points of an exposition	secondary points, elaborations, degressions
main characters or entities involved in episode	minor characters or things

当然のことであるが類似点が多く, 17, 18 から物語の中で重要な場面, 人物, そのほかにまとまりをもった行動が figure として foreground に出て来やすいことが指摘されうる。

それではつぎに figure になったものと時制の関係を明らかにしなければならない。

figure となって意識の中心に浮き出して来たものは、まさしく眼前にあるかのごとく「今」的、「ここ」的に認識されるはずである。つまり、figure となったものは現在時制によって表現されることになる。つぎの Wallace の言葉はこのことをきわめて適格に表現している。

19. “Present” tense, referring as it does to more immediate events, is more figure-like than the more remote “past” or projected “future” tenses...

When a speaker uses the “present” to refer to the past, this has... the effect of making an account more “vivid”: or, we might say, of bringing it into the immediate foreground.

このことをふまえつつ、Reinhart, Wallace のまとめ、それと時制の関係を考慮しつつ、7, 8, 9, 10 の時制の移動を考えあわせてみよう。

まず一つに、継続中の行動は過去時制になりやすく、完了した行動、あるいは一定時におこる行動は現在時制になりやすいと主張され、水鳥もその旨主張しているが、7, 9 の資料から見る限りその確証はない。むしろ別の理由がそう思わせているではないか。

二つめには法性についてはこの物語自体が過去の事実を語っているのであってほとんどこの点に問題になる表現は出てこない。

また因果関係について原因は過去で、結果は現在時制ということになるが、7 ではいく分これに類した例は見られた。9 では過去時制から現在時制に移動する 28 例のうち and と、and あわせて、はっきり別の文であることを表わす。(ピリオド)7 を含めると 18 例が現在時制の例が結果を表わすためである可能性はある。ただ因果関係を時間的に先のものが原因で結果があとだとするとそう見れるというだけであってこれも確証はない。

つぎに残るのは四つめとして、作品の展開の重要な場面と人物の点である。出来事の展開とマッチする部分、つまりその作品にとって重要な部分とその場面の主要な人物が figure になるというのであるが、9, 10 から引き出され

た結果、つまり(便宜上くり返すが)①現在時制をとる文で頻度数の多い主語は Gawain, ついで G. Knight であること, ②現在時制をとる主語をあげていくとそれはちょうどこの物語の展開の各場面の中で主要な役割を果す人物の順序とおなじくなる, ということとまさしく一致する。

以上, われわれの認識の性質上どんな部分が figure となりやすいか, また figure と現在時制との関係についてみて来た結果, この作品の現在時制について一応つぎのようなまとめをすることができよう。

20. この作品の展開の中で重要な場面, その各場面で主要な役割を果す人物の行動は figure になりやすく, 現在時制で表わされる。

つぎに 20 のまとめを補足する二つのことをのべる。まず一つは, 人間以外のものより人間が figure になりやすい, ということについてであり, 二つめには, 物語全体で主要な役割を演ずる人物が常に figure になるか, ということについてである。

まず一つめであるが, 17, 18 でみたように foreground に出やすいもの, さらにそれを具体的・個別的にあげた場合, non human なものよりは human なものが優勢 (salient) になりやすい³⁶⁾, といわれるようにこれは常識的にも理解できる。事実, この作品の中にも,

21. a. Bi a mount on þe morne meryly he rides
 Into a forest ful dep, þat ferly watz wyde,
 ...
 þe hasel and þe he3þorne were harted al samen,
 ...
 þe gome vpon Gryngolet glydez hem vnder, 740-8
 (By a mount in the morning merrily he is riding
 into a forest that was deep and fearsomely wild,
 ...
 the hazel and the hawthorn were huddled and tangled
 ...
 The good man on Gringolet goes now beneath them.)
 b. And ry3t bifore þe hors fete þay fel on hym alle,

“*Did Frank probably beat all his opponents?” の構造

And worried me þis wyly wyth a wroth noyse.
þe lorde ly3tez bilyue, and lachez hym sone, 1904-6
(and right before the horse's feet they (the pack)
fell on him all, and worried there the wily one
with a wild clamour.
The lord quickly alights and lifts him atonce,)

a では人間の方は rides, glydez は現在時制であるが、この二つにはさまれた forest, hasel, he3þorne は過去時制で描かれている。また b では、動物が fel, worried と過去時制で、lorde は ly3tez, lachez と現在時制でありたしかに人間の方が現在時制になっている。

22. His felazges fallen ...

Runnen forth in a rabel in his ry3t fare,
And he fyskez hem by fore; ... 1702-4
(His fellows rallied ...
rushed ward in a pack hard on his tail,
And the fox flits before them; ...)

ここでは逆に felazges が fallen, runnen と過去時制であり、he (fox) が現在時制で表わされている。ここからだけでも人間とそうでないもののどちらか figure になりやすいか一般化して論ずることが危険であると分る。その作品の展開の過程の各場面で主要な役目をになっているものこそ figure になるのである。

つぎに二つめの点、つまり物語の主要人物は常に figure となるか、について見てみよう。

この作品を通じて Gawain は多くの場面で主要な役割をしており当然 figure となって現在時制で表現されるのはすでに例をみた。今一つ例をあげると、

23. þe lady luflych com lazande swete,
Felle ouer his fayre face, and fetly him kyssed;
He welcumez hir morpily with a wale chere. 1757-9
(The lady in lovely guise came laughing sweetly,
bent down over his dear face, and deftly kissed him.)

He greets her graciously with a glad welcome.)

ここでは lady が過去時制であるが、Gawain が現在時制である。ところが逆の場合がある。

24. Ho commes to þe cortyn, and at þe knyzt totes.

Sir Wawen her welcumed worpy on first,

And ho hym zeldez a3ayn ful 3erne of hir wordez, 1476-8

(She passes to the curtain and peeps at the knight.

Sir Gawain graciously then welcomed her first,

and with a lovely look she delivers these words,)

ここでは lady の行動は現在時制で表わされ、その間にはさまれた Gawain は過去時制である。ここでは最早この作品の主人公だから figure になり従って現在時制で表わされるという説明はあてはまらない。ここで lady の行動は動的で Gawain の行動は静的だから、というよくある説明も可能かも知れないが、この区別があまり妥当性をもちそうないことはすでにふれた。基本的にはやはり、物語の展開におけるこの場面^{この場面}で lady が Gawain よりも figure になりやすいということであろう。ここでも又 20 のまとめが正当であることがわかる。

以上見て来た通り、この作品の現在時制を特定の人物、事柄、行動の側から特徴づけようとするのは(そうでない個所がかならずあり)無理であることがはっきりした。結局この物語の時制を特徴づけるのに最も妥当と思われるのは、この物語の展開という観点である。その展開の過程の中の各場面で重要な役割をもつものがとりわけ figure として foreground に出て「今」的、「ここ」的に意識され、それにふさわしい表現、すなわち現在時制で表現されるのである。Gawain の行動が現在時制で表現されることが多いのは主要な登場人物である、というそのことのためではなく、この物語の多くの場面で主要な役割を果しているからなのである。

時制は話者が表現しようとしている事柄・事態とどう関係しているかという主観的な要因によってもきまるものであって、時制の決定には話者の心の中でその表現される主題が real で vivid であるかが実際の物理的な「時間」

よりもはるかに重要なのである³⁷⁾。まだ「歴史的現在」というものが確立されていない時代の作品であることを考えれば、いまのべたような本来時制もっている性質が一層自由に自然な形で発現されているにちがいない。すくなくとも「場面を生き生きと描くため」という「歴史的現在」の枠組を確立したものとして、それだけにこだわって説明しようとすることは無理であることは認めなくてはならない。

もはや客観的な態度ではなく、過去の事柄・事態をも今、ここに起っているかのように意識するのを「心理的現在」とよぶとすれば、この作品の現在時制で表現された部分はまさにそれにふさわしく、ここに使われる現在時制は「生き生きと描くため」という意図的な「表出」である「歴史的現在」であるよりはむしろ、もはや客観的ではない気持の自然な「流露」³⁸⁾であり、生き生きと浮き出てくる場面を気持の動くままに受けとめ、表現した「心理的現在」の表われなのである。7, 9 で見たような現在と過去の二つの時制のはげしい交替からは場面の動きと figure と ground の間の入れ替り、話者のその受けとめ方の変化、気持の動き方を感じとることができよう。

この作品の現在時制は現在の確立した「歴史的現在」の枠組にとらわれず、それにしばられることもなく、それ以前の話者の気持の動くままのとらえ方、その表現と見るのでなければならない。その時はじめて、この作品の時制、その変り方の解明ができ、作品全体のもつ躍動感が理解されるのである。そこには確実に物語の展開とともに気もちの動くままに figure として浮き出して来るものを受けとめ、それを表現した生き生きとした一人の人を感じることができる。

この作品の現在時制は作者が各場面でそこに登場するものをどう受けとめていたか、という作品の内容そのものにかかわるきわめて重要な部分を負わされているのである。その時制を「歴史的現在」の枠組では説明しきれない‘haphazard’なものだとして、現在分詞を使って「慣用的な英語」に、あるいは、現在時制、過去時制に統一してしまっただけで受けとろうとするのは、「完璧につくられた物語」の「一人の創造的な天才」⁴⁰⁾の躍動的な気持を無視し、この作品の最も重要な部分を見失うことになる。

3. 結び. 1. では付加疑問を形と意味から検討した。これは形式的にも意味的にも「終止文」の一種と考えられ、前の文の意味に、すばやく何らかの修正を加える働きをするのがその特徴だということをみた。時間と共に微妙に動く気持の動きと不安定をよみとることができる。

2. では *Sir Gawain and the Green Knight* の現在時制を検討した。物語の展開の各段階で figure として浮き出して来る部分が「今」的、「ここ」的に感じられるため、それにふさわしい現在時制で表現されると考える「心理的現在」の方が「歴史的現在」よりも適切であることをみた。時制は認識の仕方にふかくかかわっているが、何をどう認識するかは時間と共にかわりうる。この作品の時制の変化は作者の認識の仕方のかわり方をなまなましく反映してもいるのである。

言葉は時間と共に流れるすぐれて主観的な側面をもつ。場所、時代に関係なく人間の言葉であるかぎりそこには時間のながれと共にかわる話者の気持のもち方、心的態度がうつし出される。本稿はこのことを上記二つの話題にしぼって見てみたわけである。

註

(1) Fowler (1986) p. 57. 'The modalities which an author gives to his narrators or to the speaker in a poem, characterizes their authority or 'present', and, in narrative, the point of view they adopt toward the subject matter,...'

(2) Makino の schizoprenic empathy conflict にあたらう。

(3) p. 85.

(4) 伊藤政雄, 『現代英語学辞典』

(5) Quirk et al. p. 811.

(6) 伊藤政雄, 『現代英語学辞典』

(7) Quirk et al. '...invites confirmation of the statement and has the force of an exclamation rather than a genuine question...' p. 811.

Fewler (1986) 'Tags can be very demanding, pointedly requesting confirmation of an assertion made in the main part of the utterance.' p. 115.

(8) Zandvoort § 656.

(9) 伊藤. しかしこの判断についてはかならずしも一致しない。『新英語学辞典』では「常に上昇調」とのべられており、またこの種の付加疑問と類似すると思われるつぎの例について Quirk et al. は 'the tag response with a rising tone expresses sur-

- (23) 本文中で原文引用の場合は Tolkien and Gordon (1979) によることにする。
- (24) p. 92.
- (25) Tolkien 1967 による。ほかに現在時制で訳されてるものは Banks, Jr., レクラム文庫に M. Markus よるドイツ語訳もある。
- (26) Stone の訳。ほかに Barron, のも過去時制で訳してある。
- (27) 『現代英語学辞典』
- (28) Bar-Lev and Palacas は Semantic Command として 'The second conjunct (S') is not prior to the first (S) 'chronologically or causally.' とし 'and' has a linguistically autonomous, non for symmetric meaning. ... In conversation, we first lay the background what we are going to say next.' とのべているのも参考になる。また Staal は 'and' について, i, ii の文から
- i She took arsenic and fell ill.
- *ii She fell ill and took arsenic.
- A and B=B and A の場合を and_1 , A and B $\neq$ B and A の場合を and_2 とし, and_2 は ' and_1 subsequently' の意味をもつとしている。
- (29) Weinrich, 脇坂訳 p. 173.
- (30) この種のことは心理学の本に詳しいが, 最近では文法との関係で話題になることも多い。G. Lakoff (1977), Reinhart (1984), R. Lakoff (1970), Langacker (1982), Talmy (1978), Hopper (1979), Wallace (1982) など。たとえば Wallace はつぎのように言っている。'Human perceivers do not lend equal weight to all incoming sensations, but notice some as more salient figures which "stand out distinctively" in front of a less salient ground.' '...the distinction between foreground and background is the linguistic compartment of the perceptual distinction between figure and ground in the gestalt theory. In other words, the temporal organization of narrative texts reflects principles of the spatial organization of the visual field.'
- (31) 'our capacity to focus attention selectively on a substructure within a larger configuration'... 'our capacity to impose alternate figure/ground organization on a scene'.
- (32) Wallace もやはり gestalt 心理学を使い figure, ground になりやすいものをつぎのように特徴づけている。

figure	ground
thing-like, solid, discrete	unformed, diffused, shapeless
well-defined, surrounded, bounded, closed	boundless
localized	unlocalized
with distinguishable parts	without distinguishable parts
small	large
near	far

“*Did Frank probably beat all his opponents?” の構造

figure	ground
above, in front	below, behind
more impressive color	less impressive color
greater contrast	lesser contrast
stable	unstable
symmetric	irregular
“meaningful,” familiar	“meaningless,” unfamiliar

cf. G. Lakoff (1977) ‘thought, perception, the emotions, cognitive precessing, motor activity and language are all organized in the same kind of structures, which I am calling gestalts.’

(33) Talmy (1978), p. 640 参照。

(34) Talmy (1976), pp. 66-7 参照。

(35) Wallace はこれを more salient と less salient と区別しさらに具体的にのべている。参考のためにあげておく。

	more salient	less salient
A	human	non human
	animate	inanimate
	proper	common
	similar	disimilar
	concrete	abstract
	definite	indefinite
B	count	mass
	non-third person	third person
	perfective	non-perfective
	present-immediate	non present immediate
C	eventive	non eventive
	transitive	intransitive
	action verb	stative verb
D	deliberative action	accidental action
	main clause	subordinate clause
	foreground	background

また Hopper はフランス語では action/state, affirmative/negative, human/non-human, first person/third person, singular subject/plural subject, main clause/subordinate clause, proper name subject/pronominal subject の区別が出来るとしている。

(36) 上の注(35)を参照。

(37) R. Lakoff (1970).

- (38) 今田 恵. p. 127.
 (39) 葛西 (1986).
 (40) Scholes and Kellogg. pp. 249-50.

参 考 文 献

- 安藤貞雄 (1983) 『英語教師の文法研究』大修館.
 英木一雄ほか編 (1982) 『新英語学辞典』研究社.
 Arbini, R. (1969) 'Tag-questions and tag-imperatives in English' *LI* 5: 205-214.
 Banks, Jr. T. H. (1957) *Sir Gawain and the Green Knight* Prentice Hall.
 Barron, W. R. J. (1974) *Sir Gawain and the Green Knight* Manchester University Press.
 Bar-Lev, Z. and Palacas, A. (1980) 'Semantic command over pragmatic priority' *Lingua* 51: 137-146.
 Bellert, I. (1977) 'Some assertions about presupposition about pronominalization' *Papers from Paraception on Functionalism* CLS.
 Ball, W. J. and Wood, F. T. (1986) *Dictionary of English Grammar* Macmillan.
 Benson, L. D. (1983) 'The Style of *Sir Gawain*' In *Critical Studies of Sir Gawain and the Green Knight* eds. D. R. Howard & C. Zacher, University of Notre Dame Press 109-124.
 Benveniste, E. (1966) *Problèmes de linguistique générale* Gallinard.
 Bolinger, D. (1967) 'The imperative in English' *To Honor Jacobson* Vol. 1: 335-362.
 Borrott, M. (1983) 'Criticism of Style: The narrator in the challenge episode' In *Critical Studiis of Sir Gawain and the Green Knight* eds. P. R. Howard & C. Zacher University of Notre Dame Press: 125-143.
 Bryant, M. M., 桃沢 力 (1977) *Modern English Syntax* 成美堂.
 Cawley, A. C. C. (1970) *Pearl, Sir Gawain and the Green Knight* Everyman's Library J. M. Dent & Sons LTD.
 Comrie, B. *Tense* Cambridge University Press.
 Fowler, R. (1977) *Linguistics and the Novel* Methuen and Co LTD.
 ——— (1986) *Linguistic Criticism* Oxford University Press.
 Givón, T. (1987) 'Beyond foreground and background' In *Coherence and Grounding in Discourse* ed. R. S. Tomlin John Benjamin Publishing Company.
 Green, G. M. (1975) 'How to get people to do things with words' In *Syntax and Semantics* vol. 3 eds. P. Cole & J. L. Morgan Accademic Press.
 ——— (1974) 'The function of form and the form of function' *CLS* 7.
 ——— (1976) 'Main clause phenomena' *Lg* 52-2.
 Greenbaum, S. (1969) *Studies in English Adverb Usage* Longman.
 Grimshaw, J. (1979) 'The structure-preserving constraint' *LI* 5-3.
 Halliday, M. A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar* Edward Arnold.

- Herbst, T. and Hearth, D. (1979) *Grimm's Grandchildren* Longman.
- Hopper, P. J. (1979) 'Aspect and foregrounding in discourse' In *Syntax and Semantix* Vol. 12 ed. T. Givón Accademic Press.
- Howard, D. R. (1983) 'Structure and Symmetry in *Sir Gawain*' In *Critical Studies of Sir Gawain and the Green Knight* eds. D. R. Haward and C. Zacher University of Notre Dame Press.
- Huddleston, R. (1970) 'The approaches to the analysis of tags' *JL* 6.
- Hudson, R. A. (1975) 'The meaning of Question' *Lg* 51-1.
- 今井ほか (1978) 現代英文法『文』II 研究社.
- 稲木昭子 (1983) '付加疑問について' 英語学論説資料 17: 169-182.
- 石橋幸太郎ほか編 (1972) 『現代英語辞典』成美堂.
- 伊藤健三 (1968) 『心態の表現』研究社.
- 伊藤政雄 (1973) 'Tag-Question (付加疑問) について' 英語学論説資料 17: 7-3.
- Jackendoff, R. S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar* The MIT Press.
- O. Jespersen (1955) *Philosophy of Grammar* George Allen & Unwin LTD.
- (1961) *A Grammar of Modern English* George Allen & Unwin LTD.
- (1976) *Essentials of English Grammar* George Allen & Unwin LTD.
- 葛西清蔵 (1981) “*Did Frank probably beat all his oppoenents?” の構造' 北海道大学文学部紀要 30-1.
- (1984) “*Did Frank probably beat all his opponents?” の構造' (2) 北海道大学文学部紀要 32-2.
- (1985) “*Did Frank probably beat all his opponents?” の構造' (3) 北海道大学文学部紀要 33-2.
- (1986) “*Did Frank probably beat all his opponents?” の構造' (4) 北海道大学文学部紀要 34-2.
- (1987) “*Did Frank probably beat all his opponents?” の構造' (5) 北海道大学文学部紀要 35-2.
- Katz, J. and P. Postal (1964) *Integrated Theory of Linguistic Description* The MIT Press.
- 今田 恵 (1976) 『現代の心理学』岩波書店.
- Kuno, S. (1987) *Functional Syntax* The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. (1977) 'Linguistic Gestalts' *CLS* 13.
- (1984) 'Performative Subordinate clauses' *BLS* 10: 472-480
- Lakoff, R. (1977): 'Tense and its relation to participants' *Lg* 46-4.
- Langacker, R. W. (1982) 'Space grammar, analyzability and the English Passive' *Lg* 58-1.
- Langendoen, D. T. (1970) *Essentials of English Grammar* Holt, Rinehart and Winston, INC.
- Leech, G. N. (1984) *Principles of Pragmatics* Longman.
- (1980) *Explorations in Semantics and Pragmatics* 内田・木下訳 (1986) 『意味論と語用論の現在』理想社.

- and Short, M. H. (1985) *Style in Fiction* Longman.
- Lyons, J. (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics* Cambridge University Press.
- (1977) *Semantics II* Cambridge University Press.
- (1981) *Language and Linguistics* Cambridge University Press.
- Lytle, E. G. (1974) *A Grammar of Subordinate Structures* Mouton.
- Maden, K. H. (1971) *Syr Gwayne, A Collection of Ancient Romance Poems*. AMC NC.
- Makino, S. (1976) 'Can a single sentence have more than one empathy focus?—a case study from Japanese' *BLS* 10: 472-480.
- 松原和馬 (1975) 'Emphatic tags in English' 英語学論説資料 9-3.
- 道行助弘 (1986) 『サー・ガーウェンと緑の騎士』 桐原書店.
- 水鳥喜喬 (1967) 'Sir Gawain and the Green Knight にみられる Historical Present について' 英語学論説資料 1-2.
- (1968) 'Sir Gawain and the Green Knight にみられる Historical present について (続) 英語学論説資料 2-2.
- 村田勇三郎 (1982) 『機能英文法』 大修館.
- 中右 実 (1979) 「モダリティと命題」『英語と日本語と』 林栄一教授還暦論文集, くろしほ出版.
- (1980) 「文副詞の比較」 国広綱日英語比較講座『文法』 大修館.
- (1981) 「モダリティと命題」『現代の英語学』 開拓社.
- 大江三郎 (1972) 『動詞』 (I) 講座学校英文法の基礎, 第四巻, 研究社.
- Palmer, F. R. (1979) *Modality and the English Modals* Longman.
- (1986) *Mood and Modality* Cambridge University Press.
- Radice, B. and Baldick, R. (1964) *Sir Gawain and the Green Knight* Penguin Classics.
- Reinhart, T. (1984) 'Principles of gestalt perception in the temporal organization of narrative texts' *Linguistics* 22.
- Sadock, J. M. (1974) *Toward a Linguistic Theory of Speech Acts* Academic Press.
- 沢田治美 (1976) 「文の表現性と英語法助動詞の文法的・意味的制約」『英語青年』 126.
- Scholes, R. and Kellogg, R. (1968) *The Nature of Narrative* Oxford University Press.
- Searle, J. R. (1970) *Speech Acts* Cambridge University Press.
- Staal, J. F. (1962) 'And' *J. L.* 4.
- Talmy, L. (1978) 'Figure and ground in complex sentences' In *Universals of Human Language* Vol. 4 Syntax ed. J. H. Greenberg Stanford University Press.
- (1976) 'Semantic causative types' In *Syntax and Semantics* Vol. 6 ed. M. Shibatani Academic Press.
- Thompson, S. A. (1987) 'Subordination and narrative event structure' ed. Tomlin, R. S. *Coherence and Grounding in Discourse* John Benjamin Publishing Company.

- Tolkien J. R. R. and Gordon, E. V. (1979) *Sir Gawain and the Green Knight* ed. N. Davis. Oxford University Press.
- (1967) *Sir Gawain and the Green Knight, Pearl, Sir Orfeo* Oxford.
- 坪本篤朗 (1987) ‘and とト’ 林綱『応用言語学講座』外国語と日本語, 明治書院.
- Tsuchiya, T. (1976) *Sir Gawain and the Green Knight* Tokyo.
- Wakatabe, H. (1982) ‘Tag-question, and some types of sentences’ 16-3.
- Wallace, S. (1982) ‘Figure and ground: the interrelationship of linguistic categories’ In *Tense Aspect* Hopper, P. G. Benjamin Publishing Company.
- Weinrich H. (1971) *Tempus* ヴァインリヒ. 脇坂訳 (1982) 『時制論』紀伊国書店.
- Zandvoort, R. W. (1960) *A Handbook of English Grammar* Maruzen Co. LTD.